

第16回 ちゅうでん教育振興助成（平成28年度）

報告書資料 一般-17

学校名・団体名	春日部市立粕壁小学校
HPアドレス	http://www.kasukabe.av-center.kasukabe.saitama.jp/
コ ー ス	学校支援
活動・研究 テ ー マ	積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成 ～4技能のバランスの取れた育成～
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>21世紀に生きる子どもたちは、経済・社会・文化等、あらゆる分野で相互理解に基づく国際的な協調や協力を期待されている。加えて、IT社会、ネットワーク社会とも称されるグローバルな交流が盛んになっている現在、「広い視野を持つとともに異文化を理解・尊重する態度や異なる文化を持った人々と共に生きていく資質や能力の育成を図る」ことは極めて重要であると考え、このような社会の中では、自分の思いや願いを伝え合い深め合うために積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を身につけること、また、手段としての外国語（英語）会話を習得することの重要性はさらに高まっていく。今年度は、英会話科を中心に研究を進め、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」を目指す。学習指導要領の次期改訂を2020年度にひかえ、英語教育においては2018年度からの先行実施が予想される。そこで、すでに示されている「論点整理」等を参考にし、新たな課題を見据えながら研究を進めていく。具体的には、外国語の評価4観点の中の「読む」「書く」の指導内容・指導方法、毎日9分間のモジュールであるE-タイムと週1回45分のE-タイムLの関連を深めた指導計画の工夫に取り組んでいく。また、これまで長く研究してきた「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」「話す」「聞く」についても引き続き充実を図っていく。</p>	

1 研究主題 「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」
～4技能のバランスの取れた育成～

2 研究の内容

(1) 研究の経過

本校では、平成9年度に文部科学省から「小学校における英語活動の教育課程への位置づけ」についての研究開発学校の指定を受けてから、継続的に行い、小学校に英語活動を導入した場合の指導方法や教材の開発を進め、「粕壁小方式」とまで言われる英語教育の方法を創造してきた。

本校の研究の第一の特色は、低学年から高学年まで、全児童が毎日「英会話」に取り組むことである。小学校5、6年生に「外国語活動」が導入された現在、感性豊かな低学年児童が、毎日、英会話に慣れ親しむことの意義と重要性を実感している。「英語が使える日本人」を育成するためにも、低学年段階から英語を媒体とするコミュニケーションを大切に、「聞くこと」「話すこと」を中心とした英語活動を、発達段階を考慮しながら進めることが重要であり、ビデオ教材やALT（英語指導助手）のネイティブな発音に触れることで英語に慣れさせ、発音や表現を真似ることへと繋げてきた。

(2) 本校「英会話科」の実践

本校の英語学習は、毎朝9分間の「E-タイム」と週1回45分（1・2学年は隔週）の「E-タイムL」の2つのタイプの指導時間から成り立っている。「E」は“Enjoy” “English” “Everyday”の「3つのE」を意味している。

毎朝行われる「E-タイム」は、課題スキットの自作ビデオを視聴しながら、リズムやイントネーションを真似て話してみる練習の時間で構成されている。さらに、歌やダンス、スキットを発展させたゲーム等、楽しく活動しながら練習する時間も設定している。同じスキットを毎日、シャワーのように耳にし、基本的な言い回しや英語の音を身に付けていくという、英語をインプットする時間として考えている。

一方、「E-タイムL」は、「E-タイム」で学習した英語表現をゲームや模擬体験を通じて活用する時間である。これらの活動を通して学習意欲の拡大を図るとともに、英語を使う楽しさを味わわせていく。子ども達は担任の指導のもとに、ALT等と一緒に買い物ゲームや道案内ゲーム等の活動を英語で行う。授業では、できるだけ担任も英語で説明や指示をし、子ども達も自分達が使える英語の全てを使って活動する。インプットの「E-タイム」に対し、英語をアウトプットする時間として位置づけている。 どちらの学習も基本コンセプトは、“Do your BEST”。 B… “Big voice”、E… “Eye contact”、S… “Smile”、T… “Try” を目指して活動している。

今年度は、昨年度まで研究してきた「聞く」「話す」に加え、「読む」「書く」を含めた4技能をバランスよく育成することで、児童のコミュニケーション能力の基礎を養うことを目的とした。また、毎朝9分間のモジュールである「E-タイム」と週1回の「E-タイムL」の関連を深めた指導計画を実践することにより、学習効果を高める研究を行った。

3 研究の成果

(1) 高学年を中心に「読む」「書く」活動を行った。ただ文字があるだけではだめで、やはり児童に目的意識（文字にふれる必然性）を持たせ、文字にふれる活動をすると、児童が書いたり読んだりする意欲が高まった。また、本校の児童は1年生から4年生で「聞く」「話す」を中心とした学習をし、毎日英語にふれているため、英語の文字に対する興味・関心も高いことがわかった。したがって、これまでの「聞く」「話す」を充実させ、文字にふれる場面を多く持たせることで自然と文字に対する興味・関心は高まっていくと考えられる。問題は、より力となる活動の内容を考えることである。今年度は高学年を中心にフォニックスの手法を一部取り入れて実践を行ったが、来年度は中学年から文字にふれる活動を取り入れ、文字に対する興味・関心をさらに高めていきたい。

(2) E-タイムとE-タイムLの関連がはっきりしたことで、E-タイムからE-タイムLがスムーズに行えた。また、E-タイムLで行ったゲームをE-タイムで再度行うことで、より活発にスキットを活用できるようになった。そして、E-タイムで十分にインプットしたスキットを使って、E-タイムLで自分の思いや考えを伝える場を作ることによって、児童が意欲的にコミュニケーションを図ろうとしていた。モジュールと週1回の学習は関連して行うことは効果的であった。

4 最後に

今後、国際社会に貢献できる日本人を育成するためにも、小学校全学年での英語教育の必要性が議論されるものと思われる。その時には、本校の研究成果が大きく貢献できるものと考えている。今後とも、指導内容や評価のあり方も含めて、小・中学校9カ年間の連続した教育課程の推進を視野に、「積極的にコミュニケーションを図る児童を育成」していきたい。

【研究発表会の開催】

(1) 開催日 平成28年11月18日（金）

(2) 内容 公開授業（「E-タイム」1～6学年、特別支援学級7学級、「E-タイムL」4学級）
アトラクション（代表児童による英語劇）、講演会

(3) 参加者数 250名